読書への誘い

＜第Ⅲ期　第 20 号＞通巻１１５号

１１月です。紅葉の季節です。このところの朝夕の冷え込みで、あちらこちらの木々が、赤く、黄色く色づいています。夕方の斜めの光が、木の葉を透けて見せるのは、ため息が出るぐらいきれいです。

コスモス

吉田　加南子

内部を
すっかり外にはなってしまう
ひとつきりのその咲きかたに
コスモス
おまえたちはためらったことはないのだろうか

手のさしのべかたや
眼でみつめるみつめかたを
わたしはどこかでとりちがえてしまった
群れている花々を
風がわたる
見上げると
空があたらしい

もういちど重い闇に閉ざされたら
わたしも思いだせるだろうか
わたしの内部のさしだしかたを

それとも
見失われてしまって　わたしのなくしもの
さがしにゆくには
もうおそいのかしら

（詩集『仕事』・1982 年刊）

『ジャミパン』（江國香織：文／宇野亜喜良：画・アートン・2004年刊）

大人を冷静に見つめる少女の視線。奔放でセクシーで魅惑的な母。宇野亜喜良の絵が、物語の深みへと引き込む、香気漂う小説。

母は、あんぱんやクリームパンにくらべてジャムパンを格下のように考えていて、軽蔑をこめてジャミパンと呼んだ。それでいてそれを嫌いというわけでもなく、パン屋にいくと、ついでみたいによく一つ買ってきた。ジャミパンはシンプルな楕円形で、なかに、甘い、べったりした杏ジャムが入っている。

「食べる？」

買ってくると、母は私にそう訊いた。そして、私がうなずいてもうなずかなくても、かまわず半分ちぎってわけてくれるのだ。ジャミパンはぼそぼそして、のみこんだあともジャムの甘さが口の中に残った。

私には父親がいない。死んだり別れたりしたのではなく、はじめからいないのだ。

それでも、とくべつ淋しいと思ったことはない。途中でいなくなればまた違ったかもしれないけれど、はじめからいないのだから淋しがりようがなかった。

それに、信一叔父がいた。

2004/11

信一叔父は母の弟で、私の父親がわりの人だ。私は、ごく小さいときから母に、父親が要るときには叔父さんでなんとかやりくりしなさいといわれていた。やりくりというのはひどく妙な言いまわしだが、母の語彙はしばしばそんなふうだった。

事実、私はちゃんとやりくりをした。父の日には信一叔父の似顔絵をかき、粘土細工の灰皿をプレゼントし、信一叔父ちゃん、という題で作文も書いた。九歳から十一歳までは、バレンタインデイのチョコレートもあげた。

叔父の方でも、じゅうぶんにそれに応えてくれた。叔父と母は仲のいい姉弟だったのだ。朝に弱い母のかわりに、私を保育園に送り届けるのは叔父の役目だったし、叔父は、私が高校を卒業するまで、ほぼすべての父親参観日に出席してくれた。運動会や学芸会、それに進路相談の三者面談にまで、母のかわりにきてくれたこともある。母が私を産んだとき、信一叔父は十九歳で、店の前に頭の大きな男の子の人形――ナショナルボーイという名前だと教えてくれた――のある電器店で働いていた。

私が生まれたばかりの頃は、三人で一緒に住んでいたこともあるらしい。その後叔父は別のアパートに越したが、母と私の住む団地から、歩いて五、六分の場所だった。…

母は夜働いていた。よく男の人に送られて帰ってきたが、その人たちを家の中へ入れることはなかった。

ときどき恋人ができた。恋人ができると、母はお休みの日にもでかけていった。私に遠慮などしなかった。母の、でがけに香水をつけるしぐさが好きだった。膝の裏と耳のうしろに、すばやく、おまじないみたいにつけるのだ。母がでていったあと部屋に残っている甘い匂い。玄関にとりのこされた私の、はだしの足指。奥の部屋に戻って畳にうつぶせになる。奇妙なくらい風通しがよくて、しずかだった六畳間。

母は、美人というわけでもないのによくもてた。そして、これは私が母から学んだことの一つなのだが、もし男の人の興味をひきたいのなら、結局のところ、問題なのは美人かどうかということではなく、美人らしくふるまうかどうかなのだった。

母はそうふるまった。

私の好きだった行事に家庭訪問がある。教師が個々の家の中に入ってくる、という異常事態が単純におもしろかった。学校は教師の庭だと思っていたので、その教師が自分のテリトリーをでて――そうするとまるで普通のひとのようにみえた――、窮屈そうにしているのをみるのが興味深かった。少なくとも、うちのなかでは私が優位だ。

小学校の六年間を通じて、私には三人担任がいた。二人が女で一人が男。

「きれいなお母さんだな」

男の担任は二年続けて帰り際にそう言ったが、女の担任はどちらも何も言わなかった。

教師が帰ると、母は必ずなにかひとことコメントをした。おもしろみのない男ね、とか、感じの悪い女、とか、善さそうな人じゃないの、まあちょっと愚鈍ではあるけれど、とか。私はそれを訊くのが大好きだった。学校で失われる客観性を、母の言葉が取り戻させてくれるからだった。

家庭訪問はきまって夏で、クーラーなどなかった我家の居間で、教師はみんなハンカチで汗をぬぐった。白いメッシュ状のカヴァーをかけられて、首をふるたびにかくんと小さな音を立てる扇風機は、緩慢な動きでゆるゆると暑さを助長する。コップに触りもしないのに、麦茶の氷が溶けて落ちる音。

襖をへだてた隣の部屋で、私はそれらの気配のいちいちに、耳を澄ませていた。

（pp.5-18）